

モーリシャス

島田 友子

新型コロナウイルス禍の中開催された東京五輪・パラリンピックで、私はアフリカ大陸・モーリシャス共和国の入場行進を首を長くして待ちました。

モーリシャスは南緯 20 度・東経 57 度に位置し、アフリカ大陸・マダガスカルから東へ約 900 キロのインド洋にあり、周りは珊瑚に囲まれ「インド洋の貴婦人」と称され、美しい自然であふれている常夏の国です。ヨーロッパなどから年間 130 万人以上が訪れるリゾート地で、詩人ボードレーはかつてモーリシャスに滞在し、「レースに縁どられた島」とその美しさを詠いました。

私は 30 数年前、夫の海外赴任に伴い家族 4 人と 2 年程この国に暮らしました。日本では元号が昭和から平成と変わり、消費税が導入され、国際的にはベルリンの壁が崩壊した頃です。

面積は東京都ぐらいで、首都はポートルイス、人口は約 127 万人、（当時は約 100 万人）一人当たりの GNI は 12,900 米ドル（2019 年、世銀）。DAC 基準では高中所得国に分類されています。当時もアフリカ諸国の中では政治は安定し、経済的に豊かで治安もよかったほうです。

東西冷戦時代には西側の立場にあり、日常生活では南アフリカとの結びつきが強く、アパルトヘイト体制下、世界の多くの国が国交断絶、経済制裁に踏み切る中「政治理念で飯は食えない」と多くの食料を南アフリカから輸入していました。

オランダ、フランス、イギリスの植民地支配を経て、1968 年イギリス連邦の一員として独立しました。こういった歴史的背景から公用語は英語ですが、日常会話はモーリシャス・クレオール語、次にフランス語を話し、小学校で公用語の英語の教科書をフランス語で学ぶという具合です。モーリシャンは状況に応じて言語を使い分け、テレビのニュースも英語、仏語、ヒンディー語、中国語、アラビア語の多言語放送で、子供たちはフランス語放送の日本の古いアニメ、例えば、「キャプテン翼」とか「アタック・ナンバーワン」を楽しんで見ていました。

植民地時代多くの人々が奴隷としてアフリカやインドから連れてこられ、人口の約 70% はインド系でアフリカという雰囲気はなく、宗教や民族、言語など非常に多様性があるのが特徴です。

1984 年、香港の中国返還が英中二国間で合意されたのを受け、香港からの移住者が増えており、よく「香港ピープルですか」と問われたものです。

昨年 7 月 25 日、ちょうど新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行の中、日本の大手海運会社がチャーターした貨物船が、インド洋のモーリシャスの沖合 1.7 キロで座礁し、燃料の重油などが大量に流出というニュースが飛び込んできました。美しいモーリシャスの海を愛する何千人もの住民が居ても立っても居られないのでし

よう、島の各地から浜辺に集まり、昼夜を問わずの重油の回収作業や手製のオイルフェンスを作っています。オイルフェンスの袋の中身の材料は、藁、サトウキビ、人間の髪の毛です。若い女性が「長い髪を切ることなんていとわない」とインタビューに答えます。普段とても陽気で楽天的なモーリシャンの懸命に取り組む姿に心が締め付けられる思いでした。この事故が生態系や人々の生活に与える影響ははかり知れず、また長期にわたることが懸念されました。

この事故をきっかけに 30 年以上も昔、この国で暮らした懐かしい思い出が一気によみがえってきました。とりわけ、世界中が新型コロナウイルス感染症の発症から既に一年半以上が経過しても未だに終息を見通せない中、アフリカと感染症については意識せざるをえません。

世界三大感染症は HIV 感染症（エイズ）、マラリア、結核です。アフリカでは現在もマラリアで年間 35 万人、エイズ関連で 50 万人が死亡しています。

赴任前、横浜の検疫所に何度か通い数種類の予防接種を次から次へと受けました。A 型肝炎、マラリア、破傷風、狂犬病だったのでしょうか？記憶が定かでなく、正確なことは思い出せません。予防接種の人体での影響や後遺症については、なにしろ渡航準備で忙しく考えもしなかったですね。

モーリシャスは亜熱帯気候で、洗濯物はあっという間に乾き、同時に日光消毒も。しかし、お手伝いさんはすべての洗濯物にアイロンがけ。下着に至ってはまるで大きな薄いせんべいのよう。これは蠅が洗濯物に産み付けた卵の消毒やダニ、ノミ等の虫刺さされ、マラリアの感染予防も兼ねていました。私は彼女に家事一般を任せ安心して外出をしていました。彼女の本職はフランス系モーリシャンがオーナーの家の住み込み料理人。クレオール系モーリシャンでとても働き者で仕事の合間を縫って我が家で午前中だけのパート。信用できるし仕事は完璧ですが義務教育を受けておらず、唯一のクレオール語は近年まで話し言葉としてのみ使われてきましたので読み書きが出来ません。これから先どんなに働いても彼女の生活は豊かにならず、ゆとりある生活を手に入れることは難しいように思われました。

一方で途上国は貧富の差が激しく、裕福な家庭の子女は、医療についていえば、ヨーロッパへ留学して最前線の医療を学び、帰国後クリニックを開業します。その治療費はほぼ日本と同水準であり、彼女の給料の一ヶ月分はわずか数日間の医療費に相当するのが実態でした。

植民地から独立して一般的に若い人も含め国民の政治的意識は高いのですが、貧富の格差是正には年月を要し、教育の機会均等は早急の課題であると認識しました。現在この国の識字率は 91.33%（2018 年、ユネスコ統計）に伸びています。

彼女はカトリックの信者で日曜日の午前中は教会に出かけ午後は家でゆっくり休むという生活でしたが、私達が一時帰国中、彼女の自由時間はたっぷり。その間なんとディスコで出会った人と結婚、しかも相手は 25 歳年下の青年！45 歳過ぎての初婚、

やっと巡ってきた幸せに鼻歌も出てウキウキして毎日が楽しそう。たっぷり幸せのおすそわけをいただきました。

次にエイズ、ある日、友人の番犬シェパードが私にじゃれついてきて額に傷が。ショック！さあ大変。狂犬病の心配はなかったのですが万が一の事を考えて手当を受けようと。その時脳裏を横切ったのが、ザンビアの首都ルサカにある大学で教えている知人の話。「学生の4人に一人はエイズに感染している」と。私はすぐさま高速道路をすっ飛ばし家に帰り、日本から持参した注射器と針を持ってクリニックへ駆け込んだのでした。ちなみにこの知人はモーリシャスで、歯の治療を受けたついでにちょっと観光をしてザンビアに帰国しました。

後日この出来事を我が家のインド系モーリシャンの国立病院のドクターであるオーナーに話すと「ノープロブレム」。何かにつけこの言葉何度聞いたことでしょうか。時間は守らない、約束の内容は違える、はぐらかす、物事が一回で済んだためしがない。それでも詫びるそぶりもありません。挙句の果ては子供の養育費をめぐる離婚裁判にまで巻き込まれるはめに。もうあきれんやら次第に腹が立ってくるやら「いい加減にして」と陰悪モード。先が思いやられこのままじゃ国際親善には程遠い。（ちょっと大げさ）。しかし思うに、これがカルチャーショックということなのでしょう。そう、ここは日本から遠く離れた、知識でしか知らなかったアフリカのモーリシャス。見渡せば遥か彼方に水平線が、南国の風、ゆったりと流れゆく時、陽気でおおらかなモーリシャン。いつしか、四角四面に物事を考えあくせくしても始まらないかなと・・・。

ある時はパスポートを無くしたと勘違いして、すぐさまオーナーに電話すると、パーティーの最中、電光石火のごとく駆けつけてくれて、しかも日本でいえば警視総監にあたる義兄まで同伴して、あれこれ質問されパスポートはすぐに見つかり、一件落着。着いて数ヶ月間は勝手が違う現地の生活を軌道に乗せることで精一杯。「一日一問、やれやれ今日も無事一日が終わった」かと。という訳で普段必要のないパスポートのことはすっかり忘れていました。パスポートは何か身の危険を感じた時に非難する場所、壁が厚く頑丈な鍵がかかるセイフティールームに収めていたのです。枕もとには万が一の時、命乞いができるよう常に現金をしのばせておくのです。多くの家の窓には鉄格子がはめられ、いくつものドアの鍵、番犬を飼い、用心深い人はガードマンを雇い銃も所持していました。長期の在留邦人は泥棒に入られ縛られたとか、襲われ怪我をしたとか大なり小なり身の危険を感じる被害を被っています。我が家は前のお手伝いさんの時、金のネックレスや指輪、食料品が無くなる程度で済みました

パスポートはすぐに見つかって、大騒ぎした自分が恥ずかしいやら申し訳ないやら、お二人に平謝り。すると間髪を入れずに「ノープロブレム」。二人ともニコッと笑って、責める様子もなし、こともなげにサーとパーティーに引き返していきました。この時は彼らのおおらかさに救われました。

オーナーに限らずモーリシャンは何かにつけちょっと首を横に振るポーズで「ノープロブレム」という言葉をよく使います。慣れないうちは「何？」と結構戸惑うことも多かったのですが、月日が経つにつれ、どうやらこの話し言葉には様々なニュアンスがあると。例えば、「きにしない きにしない」を始め「なんとかなるさ」・「大丈夫」・「問題ない」・「了解 承知した」・「どういたしまして」・「仕方がない」等々。モーリシャンは日常会話で状況に応じて言語を使い分けるように「ノープロブレム」も色々な意味に幅広く使い分けます。

2年間の滞在中、身の安全はもちろんの事、家族の健康管理、特に食べ物には気を使いました。日本を出発してモスクワ、パリ、ジェダ（サウジアラビア）、マダガスカル経由でやっとモーリシャス着。5歳と8歳の子供を抱えての長旅、疲れがたまっていたのか、マダガスカルで5歳の子供を除く3人が早速アフリカの洗礼を受けて感染性胃腸炎に。日本の薬を飲んで飲んでやっと一週間後に収まって。結果、体重5kg減。という訳で生水、氷には要注意です。生水は煮沸し、飲料水はスーパーでミネラルウォーターを購入。現地の人は車がエンストしたら水より安いビールをかけて冷やすとか!? サイクロンで断水した時には雨水を貯めて掃除したり、その度にタンクローリーで水を配達してもらったり、本当にくたびれます。水道をひねるとジャーと安全な水が豊富に出る日本のありがたさが身に沁みました。

大概の食料品はスーパーで揃い、ヨーロッパの食文化の影響を受け、外国産のワインやチーズ、牛、鶏、豚、鹿、鳩、うさぎ、鴨などの冷凍食品。品揃えは豊富です。私は足元が悪く、蠅がブンブン飛びかっても、現地の人々の日常生活、活気やバイタリティーが感じられるあちこちのバザール（市場）へ車でよく出かけました。

ある日、中国系のモーリシャンの友人に付き合い牛の脳みそを買いにポートルイスの市場へ。公共交通は事故が多いので利用しないようにと言われた、停留所でもないとこで乗車客を乗せたり降ろしたり、時刻表無視のノンビリしたバスに揺られて、やっと市場に着くや否や友人は木造の建物にまっしぐら。私も後を追っかけ建物に入るやその場に立ちすくんでしまいました。

憂いを含んだ悲しげな黒い目、半面口からダラーとはみ出した長くて太いグロテスクな舌、何十頭もの大きな牛の頭だけが木の台の上に等間隔に並び私を見つめています。初めて見る光景にポーとしていると「お待たせー 牛の脳みそはトーフ、トーフみたいで柔らかくてフワフワしておいしいの、けどコレステロールが多いから食べすぎはよくないの」と友人は早口でまくし立て又もや駆け出していきました。1986年、イギリスでBSE（牛海綿状脳症）の2件の症例が見つかり、後に世界的に広がる問題になりました。

市場のある一角では鶏がうろうろ歩き回っています。「これちょうだい」とおじさんに注文すると、あらかじめ掃除した丸ごと一羽の鶏の塊を、包丁であっという間に捌き、新聞紙に無造作にくるんでくれます。それを見ていた子供たちは目の前でくり

ひろげられる「生」と「死」を目の当たりにして、しばらく、鶏肉は受け付けなくなりました。私達人間は多くの生き物の命をいただいて生きていますが、子供たちは普段スーパーに並ぶ切り身しか知らず、いい体験になりました。

私は放し飼いの鶏のおいしさに目覚め、特にパーティーでは宗教上の理由から牛肉、豚肉は使えない場合が多いので、鶏肉はいつも冷蔵庫に冷凍保存しておきました。鳥インフルエンザ？ 当時この国ではこの感染症事例はありませんでしたが、あれからどれだけ動物由来の感染症が世界中で蔓延したのでしょうか。

豚肉は養豚場併設のショップで、ある時豚がコレラに感染し店は休業。こういった現地の情報は日本人のネットワークで瞬く間に伝わってきます。なにしろ 30 数名以下の小さなコミュニティ、大家族のような付き合いです。日本からのお客様はめったになく、仕事関係の長期滞在者には日本人総出のウエルカムパーティーを繰り広げ、滞在中自宅に招待したり、お世話をしたり、ついでにおせっかいも焼きました。

2 年前、その中の一人の方から一冊の本を頂きました。『ポールとヴィルジニー』（ベルナルダン・ド・サン＝ピエール著）の日本語版。現地では有名な小説でした。私はモーリシャスが舞台の本なんて珍しいと、兄弟のように育てられた二人の牧歌的悲恋物語を一気に読み終え、そして私が最も気になったのはあとがきです。訳者、鈴木雅生氏は翻訳した一番の理由として、これまで中心に研究してきた作家、ル・クレジオと関りがある作品だったからと述べています。

2008 年ノーベル文学賞を受賞した、J・M・G・ル・クレジオは 1940 年フランスのニース生まれ。18 世紀末にフランスからインド洋モーリシャス島に移住し数世代を重ねた移民の家系。モーリシャスのモカには彼の祖父、父が生まれ育った生家があり、現在では一般公開されているそうです。

彼は先祖の歴史、モーリシャスを題材とする半自伝的な作品を多く書いています。一群の作品の中で 1995 年発表の『隔離の島』（訳・中地義和）は 1891 年、祖父と大叔父（祖父の弟）がフランスから故郷・モーリシャス島に帰省する際、船内で天然痘が発生し、一行は近くのプラト島に下船させられ 40 日間検疫隔離されたという実話に基づいて描かれた作品です。

舞台の設定は実話そのままです。話者であり登場人物でもある 1940 年生まれのレオン II が中米を放浪後、離婚を経て、パリ郊外で医者として新しい勤務を始める人生の岐路にあって、隔離の島で搾取と窮乏の中で生きてきた島の住民であるインド移民の娘との出会いによって、モーリシャス島の支配階級の一員としての身分を捨て、一族から失踪した同名のレオン I（大叔父）を探索するという物語です。

40 日間の検疫隔離生活でだんだんと食料や医薬品も不足する中、一行の不安や迫りくる死の恐怖にさらされる様子が克明に描かれています。二人のレオンは旧来の価値観に問答し、アイデンティティーをめぐって苦悩しますが、「隔離の島」の体験を通じ、本当の自分を確かめます。そして誕生の地、誕生以来切り離されたルーツ・父祖

の地でもあるモーリシャスから解き放たれ、それぞれ新たな人生を歩み出します。

記者中地氏はあとがきに、この作品の原題は「La Quarantaine」。「約四十、四十代」を意味するが、また、伝染病に感染した恐れのある者を約四十日間の検疫隔離に服させることを意味する中世以来の定型表現「mettre en quarantaine」をおのずと喚起するが、日本語の「隔離」はそのような意味を持たない。よって書物のタイトルとしては作品全体をイメージしにくいので、作者に了解のもと『隔離の島』を邦題にしたと記しています。

ル・クレジオは、1963年、23歳の若さでデビュー作『調書』でルノードー賞を受賞。1992年創設の「高校生のルノードー賞」は1988年創設の「高校生が選ぶゴンクール賞」に倣ったそうですよ。CAROTTES「高校生が選ぶゴンクール賞」で作品が紹介されていましたね。

同じく感染症の災厄を描いた作品に、ル・クレジオ同様クレオール作家で43歳の若さでノーベル文学賞を受賞したアルベール・カミュの『ペスト』（訳・宮崎嶺雄）があります。1947年第二次世界大戦後フランスで発表。昨年コロナ禍の中で話題になりました。私たちは「フランス語のテキストを読む会」でカミュの『異邦人』を読みましたね。

舞台は自らが生まれ育ったフランス領アルジェリア（当時）の港町オラン。この町でペストが発生し、ペスト感染拡大予防のためオランの町は封鎖され、人々は隔離され孤立した町の中で悪病と闘います。カミュは不条理下での人間を克明に描き、人間がどのようにふるまい、いかに生きるべきかを問いかけています。

モーリシャスから飛行機で約1時間45分のアフリカのマダガスカル、面積は日本の1.6倍、人口約2,760万人。日本ではキツネザルのアイアイやバオバオ街道が有名で、同会で読んだ『星の王子様』にもバオバオの木が登場しますね。2018年、広島市植物園のリニューアルオープンの記念植樹ということで、直径2メートルのバオバオの木がオーストラリアから移植されたことは記憶に新しいところです。

同国は感染症でいうと世界でも有数のペストの発生国で、1990年、二度目の訪問時にもペストが流行り死者も出ていましたが、首都アンタナナリボのショップやレストランは通常の営業、市場も多くの人でごった返し何ら変わった様子もなく、そこには普段の市民の生活がありました。

最近では2017~18年に流行して終息するまでに、死亡例221例を含む計2,575名の患者が報告されました。あれから30数年もの時が経過し治療法があるにもかかわらず、未だにペストは撲滅していません。「いい時代もあった」と聞きましたが今も昔も世界の中では最貧国の一つであり、現在一人あたりのGNIは480米ドル（2020年、世銀）です。

空港からアンタナナリボに向かう暑い日の道すがら、素足で歩く多くの人を見て衝撃をうけました。子供が「お父さん、どうしてみんなはだしで歩いているの」と問えば、

「貧しいから靴が買えないんじゃないの」と答える。すると「でもくつをポケットに入れて歩いている人もいますよ」と。そんな親子の会話を思い出します。

現在、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の中、モーリシャスの 2 回目のワクチン接種率は 64.5 %、日本は 66.0 %ですが、マダガスカルは 1 %未満です。（10 月 15 付けロイター）アフリカ全体では同ワクチン接種率は約 5 %で、感染者致死率も世界平均を上回っています。

こういった状況の中、先進国と途上国のワクチン供給格差が問題になっており、もしこのまま途上国の人々全体に、コロナ対策の重要課題であるワクチンが行き渡らなければ、世界の感染は収まるはずはなく、またコロナ禍が長引けば人々の生活は増々厳しくなると危惧します。

作品『ペスト』に、ペストの蔓延ともに、「貧しい家庭は食料補給できわめて苦しい事情に陥っていたが、一方裕福な家庭は、ほとんど何ひとつ不自由することはなかった」というくだりがあります。市民は「パンか、しからずんば空気を」と皮肉な文句を叫びます。蔓延が深刻化した時期からは、ペストの病気よりも貧困、困窮の方が恐怖とされています。

新型コロナウイルス感染症の収束がなかなか見通せない中、朝刊で広島県及び中国地方の感染者をチェックすることが日常となり、外出自粛や行動制限など制約がある生活に不満を覚える時もあります。そんな時思い出すのはモーリシャスの事。途上国の生活はやはり厳しく、もちろん感染症に関してもリスクは常にありました。それでも彼らは決して悲観的ではありません。置かれたぎりぎりの環境の中でたくましく生き、バイタリティーがありました。「ノープロブレム」の精神、心意気ともいうのでしょうか、訳の分からないことで悩んで先々のことをあれやこれやと考えていたら日が暮れるよと言われるかもしれません。

最後に、「神はモーリシャスを最初に作り、そしてモーリシャスを真似て天国を創った」と『トム・ソーヤの冒険』で知られる作家のマーク・トウェインは賛辞を送ったそうですが、もし彼が生きていたら、新型コロナウイルス感染症や重油流出事故による海洋汚染、地球温暖化による海面上昇で国土が損失されているこの国の現状を何と表現するのでしょうか？

2017 年、再びモーリシャスを舞台とするル・クレジオの作品『アルマ』が刊行されました。9 月 18 日付けの中国新聞に、商船三井が重油流出事故による貢献事業として、この国で波力発電の実用化を検討しているという記事が掲載されていました。これから先もモーリシャスの事に関心を持ち続けたいと思います。

2021 年 10 月 15 日